

フェリスと女子教育 「フェリスの歴史に込められた 女性の愛と誇り」

キスト岡崎さゆ里

皆様こんにちは。本日は皆様とご一緒にフェリス女学院が来年創立150周年を迎える、その意義を学び喜びを深くするため、このようなカウントダウン企画に参加できることを大変嬉しく思っています。私自身は残念ながらフェリス女学院の卒業生ではなく、その教育の恩恵を受けた証をすることは出来ません。ではどういう立場で今お話をしようとしているかと申しますと、私は日本人ではありますが、宣教師なのですね。それも、創立者のメアリー・E.キダー女史と同じアメリカ改革派教会（当時はダッチ・リフォームドと呼ばれました）、日本に最も早い時期に宣教師を派遣した教派から派遣されている「宣教師の立場」から、フェリス女学院の歩みと功績を喜ぶものとしてお話させていただきます。

本日のテーマは、フェリスと女子教育です。これは、非常に難しいテーマだと思います。なぜならば、現代の日本において、＜女子教育＞の意義というものがあるのだろうか？という問いを避けることはできないからです。

創立者のキダー女史が女子教育を始めた150年前は、日本において女子には教育を受ける機会がほとんどなかったという現実がありました。女子に教育は不必要という、当時の差別的な考え方、社会制度や風潮の中にあって、フェリス女学院が女子のための学校の先駆けとして創立されたのは画期的なことであり大変誇りにすべきことです。

また、今日お集まりの皆様がご自分の受けた教育を振り返って、あるいはお子さんがたの学びがこの女子学校でよかった、と思える、そういう同窓生やご家族がたくさんいらっしゃるとしたら、それは学校としてもありがたい宝です。そのような思いを抱くことができる教育をフェリスが行ってきたことは十分意義があります。

フェリスの女子教育の恵みの果実はこれまで十分あるとして、しかし社会が変化して女性の人権が認められるようになり、男女共学が普及した時代にあって、フェリスの女子教育とは何だろうか？ その時代のニーズがあったから、女子学校とはそれを手当てするための施設に過ぎず、そのニーズが満たされれば役割は終わりなのか。これがこれからのフェ

リス女学院の将来を考えて行く上で非常に重要な問いです。

私は、今この難しい問いに向き合うことで、私たちフェリス女学院が目指すものを確認することができると思っています。それは、人間の根源的に抱える課題を見据え、そのうえで人間社会の構造の変化や流行にとらわれない、もっと長い目と大きな視野をもって「教育」ということ、よく生きるということを考えることになると思うからです。

1. 女子教育の目的は？ 男性社会の枠組みの限界

世界には今も女子が学校に行けない国はたくさんあります。経済的な理由、治安の問題、宗教の問題などが背景にあるとしても、確かに男性社会では、女性に教育を与えないことにより無知・無力化させて支配下に置く、隷属させるという状況は現代もあります。女子が＜自分の能力＞を発展させる手段も無ければ、それを生かす場も経済力に変える場もありません。

それに比べると、日本は古来から女性であっても身分の高い層では教養を身に付けていましたし、封建社会にあっても庶民には寺子屋などが活用されました。そして今は大学の数が増え、女子も、大学は行かなくていいと言われていた時代から変化して、短大への進学が流行し、さらには女性が四年制大学に行くのも当たり前の時代になりました。

そこで、女子の高等教育の「メリット」についてあれっと思わされたものをいくつかご紹介します。女性が高等教育を受けると、世界の人口爆発を防げる。なぜなら高学歴女性は初産年齢が遅くなり、生涯に産む子どもの数が減る。さらに高学歴高所得の女性は、出産休暇や育児休暇などで所得収入が減ってしまうのを防ぐために出産数を抑制するから人口爆発を防ぐのに有効。

あるいは高学歴女性が増えるとジェンダー・ベースド・バイオレンスすなわち男性からの女性への暴力が減る。なぜなら暴力は男女の経済的な格差による力関係に起因しているから、女性が経済力を持つと暴力を受けることが減る。というメリットを説いているものもありました。

これを聞いてどう思われますか？ メリット・利点があるといっても本人と社会にとって何を「利益」とするのでしょうか？ 特に、子供を産む・命を育むということについて、「教育レベルの高い女性は、コストパフォーマンスの善し悪し、つまり経済効果を基準に出産を判断する」という言い方は、これは命ということそれ自体を金銭化・数字としてと

らえていることで危険性を感じますね。そこに「人」はいない。また、男性から女性への暴力も、女性が経済的に対等になれば減るという考え方は、金に物を言わせて黙らせるという力構造を女性にも踏襲させていることになります。そこに「対話」はない。

これらは一例に過ぎませんが、結局、経済つまり金銭が、自立と自由を得させるという前提になっており、教育はそのための手段ということになります。

数年前に政府から日本はこれから「女性が輝く社会」になるというテーマが掲げられ、総理大臣の口から何度もこの言葉が発せられました。女性への教育が行き届き、社会的立場も向上し、男性と同等に力を発揮できる社会を目指すように聞こえます。

しかし当の女性たちの反応は、

- ・女性を安価な労働力としか見ていないことが伝わってくる
- ・男社会の都合で「家に入れ」と言ったり「外で働け」と言ったり…男の都合で女を動かそうとしている
- ・実際には家事に育児に介護にと、男性と対等の条件では働けない。でも、女性からも対等に税金を取ってやろうという政策の始まりだと思う。

という声が実際に上がっています。

要するにとにかく人手不足だから、今まで無産者だとみなしていた女性を働かせ経済を回したいという本音が見透かされているのですね。

こうしてみると、女子が高等教育を受け経済力を得ても、男性の側は変わっていない。出産も女性だけの問題、暴力も女性次第？現状の男性社会の構造や、経済中心の価値観を崩さないまま、男女差が格差として存在する現状の枠組みの中では、女子教育の神髄・本当の必要性や良さを語ることはできないのではないのでしょうか。

2. ニーズベースではなくゴールベースへ キリスト教教育

その意味で、女子学校というのは、男性社会の枠組みから離れて、女子の学びが守られる場です。

フェリス女学院 150 周年記念特設サイトから抜粋した「女性（女子教育）」の部分を読みますとこう書いてあります。「フェリス女学院は、女性だけによる環境の中で性差を意識せず、『女性』であるとともに一

人の『人』として自らの資質を見つめ人間としてのあるべき姿を発見することを促します。」まさにそれは女子学校の一つの大きな特徴であり魅力かも知れません。

ただし、これは女子学校の利点の全てではないように思います。実は私は女子校で学んだ経験が無いのです。小学校から大学から大学院、アメリカの神学大学院まですべて男女共学校でした。では共学校では一人の人として自らの資質を見つめることは出来ないか？というそれはそんなことはないと思います。男子と一緒にというのも学ぶことが多いです。中高生男子って本当にバカ！とかね。学校内で実際に男女差別構造があるのは確かで、それに闘うことも経験するわけです。

ですから私なりに男女共学校と比べ、あえて女子学校の良さを言うなら、思春期から大人になる女子がのびのびと安全に学べる環境はあると思います。男性中心的な考え方に取り込まれる恐れなく思想を発展させることができ、無駄な闘いもないかも知れません。そもそも、いろいろなニーズに応じて、様々な学びの場があっていいと思います。

しかしそれも、女子だけの学びの場が必要というニーズがあるから、それに応える・手当てするためにあるのだというのでは、弱いと思います。今はまだ男性優位の社会で女子が弱いから、立場が低いから、女子らしく学べる場を与えてあげなければというパターンリズムの温情によって女子学校は存続するのでしょうか？

逆に、私は女子だけで無くても困らない、と言う人が増えたり、教育において男女に違いもつけないとなれば、「女子教育」と呼ばれるものもなくなるのでしょうか。

非常に挑戦的なことを申しておりますが、これまでは、一般論的に「女子教育」「女子学校」の話をしてきました。ここから私たちはフェリスと女子教育、というより、「フェリスの女子教育」とは何か、ということを考えたいと思うのです。

私はまず先ほどまで話していた、ニーズベースで考えてはいけないと思います。ニーズベースで考えるといわゆる世からのニーズがなくなれば、女子学校の存在意義も失います。それよりも、ゴールベースで考えた方がいいと思います。ゴールをベースにするというのも変ですが、大事なのは先ほどのステートメントの「人間のあるべき姿を発見する」という点です。それが私たちの教育の目的、ゴールだと思うのです。

人間のあるべき姿とは何か？それですよ。もちろん「自由かつ主体的に判断のできる女性」になっていくのは素晴らしい。判断基準は何か。先に話した、経済力や権力が人を自由にすると考え、それを判断基準にする教育だとしたら、偏差値を上げ数字で教育内容を評価することになる。これが世の価値観です。女子が、男性中心の社会に何とか食い込むこと、同じ力を得て同等になること、それが「人間のあるべき姿」か、それが女性のゴールなのかということです。

しかし、そうではない。そうではないから、フェリスは、フェリスで学んだ女性たちで「日本は変わっていく」と考えているわけです。

フェリスのゴールは「人間のあるべき姿」を発見することです。それをどこに探すのか。聖書に尋ねるのです。フェリスの女子教育は、キリスト教教育である。この世の価値基準ではなく、聖書の価値観、世界観、人間観を基盤にして自分を知るという教育ですから、まず聖書の根本的な女性観をご一緒に見てみたいと思うのです。

3. 創世記に尋ねる女性の特性 共に生きる者

聖書に初めて女性が登場するのは、創世記です。

創世記第1章：27節 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。

創世記第2章：7節 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

18節 主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

22節 そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。

23節 人は言った。「ついに、これこそ わたしの骨の骨 わたしの肉の肉。・・・」

クリスチャンでなくても知っており、様々な文化に影響を与えている人間観です。この個所は、まず人は男であり、女はそこから造られたと書かれています。だから、生まれつき男に劣り従属する主人公に対するサブキャラクター・脇役ととらえられ、女性蔑視につながるとして問題にされる部分でもあります。そのような印象は確かにあります。

しかしここで注目していただきたいことは、三つあります。一つは、

男女はまず同じように神にかたどって造られたということ。聖書の神は完全で全能の創造主、愛と正義の存在ですから、人はそもそもそれにかたどって、愛と正義を目指すように造られた存在だというのが聖書の人間観です。

そして神からすると男女は同等の存在です。皆さんはお子さんがあるかわかりませんが、二人いれば二人とも自分の子です。神にとって二人ともそれぞれの個性に沿って手塩にかけて育てたいと願われた対象であることは間違いありません。

二つ目はそして彼に合う「助ける者」という言葉です。助けることができるのは、それ相応の力があるものでなければなりません。彼にふさわしい『助け手』と訳している聖書も多いです。ヘブライ語の原語では「助け」を「エゼル」と言いますが「包む、守る、手伝う、支援する」という意味があります。他の辞書では「苦難の時に援助、助力を与える」という意もあります。この「助け(エゼル)」は聖書の中に何度も出てきますが、多くは神の助けを表しています。例えば詩編 121 編に 2 節「わたしの助けは来る 天地を造られた主のもとから」や詩編 33 編 20 節「我らの魂は主を待つ。主は我らの助け、我らの盾」など、神の圧倒的な力による「助け」と同じ言葉なのです。それを思うと、女性が単なるお手伝いではなく、神のような愛と力で他者を包み、守り、苦難から救い出す存在として造られたことが大事だと思うのです。以上のことは聖書に明らかです。

今回もう一つ注目したのは、女性はアダムの後から造られた、つまり女性は造られたときから一人ではなかった、ということです。女性は造られたときにすでにアダムという別の人がいた、ということです。

例えばマーク・トウェインの「アダムとイブの日記」という小説があるのですが、題名そのものの内容でまさに創世記のアダムから見た一日、イブから見た一日が記されていて、もちろん聖書そのものではなくユーモア小説なのですが、その中でアダムがこう書いている「長い髪をしたこの新しい生き物は、まったく邪魔だ。・・連れなんていうものには慣れていないからだ。・・どうやら私たちは雨に合いそうだ。…私たち？はて、どこでこんな言葉を覚えたのだろう？ああそうだ、あの新しい生き物が使っている言葉だ。」と。つまり、アダムは独りでしたから「私 I」しか知らなかったのに、この新しい生き物である女・イブは最初から「私

たち WE」ということを知っている。

面白いですね。つまり女性は最初から誰かと共に生きる存在、私たち、コミュニティ、交わりにある存在だったということです。

そしてそれが神の御心である・神の良しとしたことであるのです。

神は、アダムだけだった時に「人が独りでいるのは良くない」と言われました。つまり、「私」だけで生きるのは良くない、人は「私たち」として生きる者である。個人としての幸せの追求だけでなく、共に生きる者、すべての人が神に造られた人格として尊重され、それぞれが本来あるべき姿、すなわち神の似姿に向かって生きる。互いに助け合い、苦難を乗り越え、成長するのが人間のアイデンティティなのだ、聖書に書いてあるのです。

4. 「人間としてのあるべき姿」イエス・キリスト

しかし聖書を読み進めると、人は、神の導きに従って学び、成長・向上する道よりも、頑迷に自分の思いを中心にする生き方を選び、そのために神から離れてしまいました。そのため本来の人間性からも離れ、神の愛と正義を理解できない者となりました。これが罪ということです。そして「人間としてのあるべき姿」を見失ってしまいました。

けれども、神は人間を見捨てず、イエス・キリストという神の御子を与えてくださいました。キリストこそ人の罪・つまり自己中心という罪を持たない「人間としてのあるべき姿」、究極のロールモデルだからです。そして、同時に、神の愛を体現した方だからです。

その神の愛は、人間の無理解や裏切りにもかかわらず、御子イエス・キリストを十字架にかけても、人を罪から救おうとされたことに現れました。そしてイエス・キリストの復活と共に私たち人間は罪から解放されて、新しく生まれ変わることができる。罪ある自分であってもそれに負けずに、「本来あるべき人間の姿」を目指していけるその自由・希望が与えられたのです。

フェリスの女子教育は、単に女子の教育のニーズがあったから、それに愛でこたえただけではありません。教育を通して何よりもこのことを伝えたいというゴールがあった、そしてそのゴールはさらに、自分の人生だけでなく、共に生きる他者もこのよい知らせを知って、この世に神の愛と正義が治める平和の国を実現するというゴールを目指していたのです。

そして女性は、存在の根源そのものから共同体の中にあり、人と関わり、交わりを造る存在。それが、時に面倒でも、煩わしくても、傷ついても。なぜならそれが愛だから。神が人を放っておけないでイエス・キリストを十字架にまでかけたように。愛は面倒くさい、理解されない。でもそれをいとわないで、糧にできる力が女性には備わっているのです。それが、アダムが一人でいてはいけない理由だったし、一人では苦難に陥る・愛を知らないという究極の苦難に陥るときに、助ける者となることができる、それを信じているのが、キリスト教信仰に基づいた女子教育です。

5. 教会婦人たちの愛と誇りの結晶

私たちは今日、フェリス女学院が創立の時からこの愛を経験している事を覚えます。

皆さんもご存じの通り、明治時代の初め、開国したばかりの日本にアメリカから数多くの女性信徒宣教師が日本に派遣されました。キダー女史のように単身の女性たちも、よくぞこの見知らぬ極東の国に来てくれたものと思います。その彼女たちを送り出していたのは、当時の教会の名も無き多くの女性信徒たちだったのです。

19世紀初頭アメリカでは世界宣教への熱が高まっていました。教派を超えて海外宣教局も設立されていました。さらに女性だけの、婦人一致海外伝道協会という組織が生まれました。

なぜ女性だけか。実は当時のアメリカの教会は、女性牧師は認められなかったどころか、教会の役員や教会学校の先生も女性にはなることができなかつたのです。そのようなリーダーシップポジションは与えられなかつたのですね。しかし女性は何も権利や地位がほしかったわけではなく、イエス・キリストに仕えて伝道の働きをしたかつたのです。でも教会内では用いられない、それでどうしたかという、女性は外へ出て行つたのです。イエス・キリストの福音がまだもたらされていない土地に、自分たちと同じように小さくされている婦人や子どもたちに、男性指導者ではなく「婦人の伝道は婦人の手で」というゴールが、ビジョンが与えられました。神の前に全ての人が平等であり愛されている大事な存在だと伝えたかつたのです。そして教師などのキャリアウーマンの信徒に思いを託して送り出したのです。

女性のほとんどは自分の収入を持つことができなかった時代に、自分

たちだけで活動資金を作れたとは考えられないことです。しかし、彼女らは夫の給料から預かった生活費をやりくりして「海外伝道のために週に1セントを」献金しようという、小銭献金の呼びかけに（リーストコイン）全国各地の女性が応えたのです。

女性たちが、自分が差別され虐げられた状況で、自らの身分向上のためではなく、ましてや成功者の足を引っ張るのではなく、自分たちに与えられた境遇から学んで「他の誰か」のために尽力した。

その結果生まれた日本のミッションスクールは、確かにキリストの教えに従った女性たちの愛の結晶なのです。恵まれない立場にいた女性たちが、卑屈さや闘争心でなく、誇りを持って遠い極東の地日本の、見も知らぬ少女たちのために、愛を送った。それが形になったのが日本の女子教育です。日本の女子教育は、その思いを受け継いできた、自分たちのためばかりでなく、他者のために愛と祈りをまた形にしていくことを忘れないためです。

6. フェリスの伝統に流れる愛

フェリスの伝統にはこの愛が脈々と流れており、また広がっていきました。キダー女史は特別な立場の宣教師でした。アメリカ改革派教会（これからRCAと呼びますが）で、まだ婦人海外宣教局が設置される前に、サミュエル・ブラウン牧師などキャリア宣教師に推薦されて、男性に交じって海外伝道局から派遣され来日しました。初の女性単身宣教師です。

フェリス女学院の名前は、RCA 海外伝道局を立ち上げた初代総主事アイザック・フェリスとその息子で同じく総主事となったジョン・メイソン・フェリスに由来するものですが、以前は単にボスの名前を付けたのかと思っていました。アイザック・フェリス牧師はニューヨーク大学三代目総長を兼任しながら教会の海外伝道に尽力し、フェリスの校舎建築にも財政的援助を惜しまなかった素晴らしい協力者だったのです。その財政の背後には多くのアメリカの教会の献金があったはずで

す。また個人的にも、1873年に結婚した夫のミラー宣教師が、自身の所属する長老派教会から、妻の所属する改革派教会に籍を移して妻のフェリスでの宣教を支えたことも、同じ宣教師として感動します。

フェリスの歴史には大変多くの功労者が、尽くしてくださった先生方がおります。二代目校長のユージン・ブース宣教師は41年もフェリス

に仕えてくださいました。まだ発展途上の異国でそのような長きにわたってお働きになるのには、本国のご家族・親御さんたちの深い理解と信頼が無いとできません。

先日、10月4日にブース校長のひ孫のスティーブ・ジョンソン夫妻がフェリスに来校されたことを聞いて大変嬉しく思いました。ひ孫の代まで語り伝えられるほど、ブース校長一族にとってもフェリスが大事なもののなのです。

そして三代目のジェニー・カイパー校長。関東大震災で、瓦礫の下敷きになっても助けてくれる人たちを逃がし、そして「神のご意志は全てよし」とおっしゃって亡くなった。そのような方々の自己犠牲の愛が、まさに「人間としてあるべき姿」すなわち愛の人イエス・キリストにならう姿なのです。

7. 一人も取りこぼしなく 愛の家庭教育

だから私たちはもっともっと、愛の発信源になっていかなければならないし、そのためには学院が愛に満ちていなければならないと思います。

先に、人のニーズが満たされれば役目は終わりか、というようなことを申しましたが、実は真のニーズが満たされる時はまだまだ来ません（キリスト教的に言うと、キリストが再臨するまでは来ません）。人は相変わらず罪に陥るし、この世は不安だらけです。若い人にしても、今、成績がいいとか進学や就職がうまくいったと言っても、一時のことです。人生何があるかわからない。それは皆さんもよくご存じだと思います。しかし大事なものは、安心できる場所があり、信頼できる人がいる、という基軸を持っているかどうかではないでしょうか。

イエス・キリストは、多くの癒やしの奇跡を行いました。その時に「安心して行きなさい」と声をかけられます。また病気になるかも知れない、つらい目に遭うかも知れない。しかし私を信じて歩みなさい。何が起きても大丈夫だと。

私は理事会に出ていますと学校の報告を伺います。先日は、大変印象に残ったことがありました。フェリス女学院大学では、卒業時の満足度調査でも、満足して卒業する学生が9割をこえているということ。さらに卒業後の進路について詳細な表を見せていただいたところ、不明率0%をここ数年続けているそうではないですか。つまり、大学において（中

高と違ってもう大人ですし管理しきれないはずなのに)、卒業生の全員を知っている、一人も取りこぼしが無い、ということです。よもや迷える子羊が一匹いたとしても、イエス・キリストのようによい羊飼いが探して見つけてくれたということです。いつも見ている、寄り添っている、そんな教育がなされているならば、ここに学ぶ生徒・学生は「私は誰かにとって大事な存在なんだ」と思えるのではないのでしょうか。

その意味で、フェリスの教育は家庭教育に近いものがあるのかも知れないと思います。始めに言ったような、行政なり社会なりが自分たちに都合の良い人材を作ろうとする教育や、彼らの基準の逸材を集めてリーダーシップ教育をするのとは違う、家庭教育とは、愛する子を手塩にかけて育てる教育です。

学ぶ者にとっても、信頼する相手が、自分のために愛を持って導いてくれていると信じられる関係。これが本来の神と人との関係です。それをかなえるのがフェリスの女子教育ではないのでしょうか。

8. フェリスの使命 男性対象ではなく神対象の自己尊厳を

そしてフェリスで学んだ女性たちは、フェリスで培ったフェリス・スピリットつまり愛のスピリットを持って、使命を果たすべく社会に出て行くのです。その使命とは？

女性が女性だからと言う理由だけで不利益を被る男女格差、そして差別は厳然として私たちの日常にもあります。この世界で、女性差別が解決すれば全ての差別は解決していると言われていています。なぜ？女性はマイノリティではないからです。人類の半分が残りの半分に差別されているという、女性差別は異常なそして長く解決しない差別問題です。それが、若い生徒・学生さんたちの前に立ちはだかる壁となるのは本当に心苦しいです。やりたいことができないとか、可能性が閉ざされるということ以上に、人としての尊厳が認められないということが問題なのです。つい昨年、東京医科大学の入学試験で、女子の受験生は一律加点がない、実質減点されていた事実が発覚しましたね。その時、一緒にニュースを見ていた娘が「女の子って言うだけで、四浪扱い。四浪の人が悪いって訳じゃないよ」とつぶやきました。差別の怖いところは、何が悪いのかな、って思わされることなんです。いわれなく不当に扱われ続けると、自己尊厳が低くなります。

さきほど、当時のアメリカでは女性が教会で何の役割を持つこともできなかつたと申しました。しかしその状態はまだまだ解消していません。

私は、アメリカ改革派教会の牧師になる勉強をし、資格を取り、按手と言って正式に任命されるころまで行きましたが、難しいこともありました。私と夫が日本への宣教師として派遣されるための献金集めに奔走していた頃のことです。ある教会が、私が牧師按手を受けた直後、献金支援を取りやめて来ました。牧師に事情を聞きに行くと、「私たちの教会は女性の牧師を認めない。イエス・キリストは男性だけを弟子に選んだのだから。」とはっきり言われました。「日本では女性牧師も受け入れているし、その方が役に立つのですよ」と言いましたが「聖書的でない、女性は牧師にふさわしくないというだけだ」と言われました。

RCA で女性の牧師按手が認められたのは1979年と最近です。しかし、翌年の80年には、良心的女性牧師拒否権つまり、信仰に照らして女性の牧師を拒否できるという権利がRCAの総会で採択され、なんと2013年まで有効でした。私が初めてのアジア人女性としてRCAから按手を受けたのは1995年ですから、それを否定する権利があったわけです。

実はそれまでも、神学校の同級の男性にも「個人的には君は友達だしいい人だと思うけど、女性が牧師になるのは許されないことだから諦めた方がいい」などと悪気なく言われたりしていました。

しかし、私はその時心から出てきた言葉があるのですね。「あなたのおっしゃるとおり、私のような者は牧師にふさわしくないと思う。牧師を目指した覚えなんかない。あなたは私を牧師として選ばない、でも私が選んだわけでもない。でもこうやって按手を受けるに至ったというのは、これは神の選びなのでしょう。私たちそれを否定できますか？」と。

今思うと、男性対象の「女性」として自分を見るのではなく、神対象に自分の弱さも至らなさも知り、そしてそれでも用いていただけることに本当の自己尊厳を発見したのでですね。

9. For Others 他者のために

フェリス・スピリット、「他者のために」。全ての人が、神の前に自己尊厳を持ち、キリストに倣い、この世を愛と平和と正義の神の国となすために。世界がこのようになるために、この当初からのゴールをフェリスは忘れずに掲げ続ける。

そのゴールのために、フェリスの女子教育は愛の家庭教育である、そこで女性の利点を活かして「交わりを作っていく」のです。富と力に屈せず、まず女子から始めよの気持ちで、ここから始めよう。今、目の前の相手と、愛の共同体を造っていこう、そして社会に広げていこう。

競争社会で相手を倒して権利を手に入れるのではなく、手を取りあい協力の社会を作ろう。これがフェリス・スピリットです。

10. 一人じゃない 宣教師の背後にある祈り

最後に。この使命に向けて歩む私たちは、一人ではありません。ずっと祈られています。私は宣教師なので知っているんです。宣教師というのは、本国の教会たちが祈りを持って派遣しているからここにいるんです。私たちの場合、具体的には40の教会が無償で献金を献げて私どもを送っています。

日本で少しでも多くの人が、イエス・キリストの愛を知って、愛の社会を作っていくようにと願って。それだけです。150年前も、今も変わりません。

私と夫は、アメリカに三年に一度帰ると、それらの支援教会に報告をします。業績を報告するわけじゃありません。ただ、日本の教会やキリスト教主義学校や施設、婦人会連合やそして一人一人のクリスチャンたちが、たった1%のクリスチャンたちがどんなに主のためにがんばっているかを報告するのです。私はフェリス女学院の話もしています。すると、彼らも励まされる。自分たちが、宣教師を通して大きな神のわざに関わっているのが嬉しいのです。

(少し写真を紹介します。)

だから皆さんは覚えられ、祈られています。フェリスが150年間の長きにわたって、大きな愛の交わりの中にいる幸いを感謝して創立を記念しましょう。祈りましょう。

キスト岡崎さゆ里

東京都出身、日本キリスト教会小山教会で受洗。立教大学卒業。立教大学大学院博士前期課程修了後、米国に留学。ウェスタン神学大学院およびニューブランズウィック神学大学院卒業。本学創立者メアリー・E. キダーの派遣元であるアメリカ改革派教会(RCA)の牧師按手を受け、宣教師として1995年に家族で来日。アメリカ改革派教会牧師、日本キリスト教団協力宣教師(東京・久が原教会)。2002年よりフェリス女学院理事。